

# 11 . 天皇・マッカーサー会談

## ・天皇とマッカーサーの会談

第二次大戦の終戦後、日本はGHQの占領下におかれることとなった。最高司令官マッカーサーは、8月30日厚木飛行場に降り立ち、9月2日終戦文書（降伏文書）の調印に臨んだ。

その後、マッカーサーは幣原喜重郎首相らとの会談は行ったが、日本国の元首である天皇との会見はすぐには行われず、マッカーサーの日本到着から1ヶ月近く経った9月27日、昭和天皇が当時マッカーサーの滞在していた米国大使館を訪問することで実現することとなった。

この後、天皇とマッカーサーは何度も会談することとなるが、特に有名な初回の会見の様態について、マッカーサーが後日記した内容を「マッカーサー回想記」から引用したい。この文章から伺えるように、9月27日の会見は、マッカーサーが天皇に好意を抱き、天皇不訴追の決定をする一つの契機となったとも考えられる（無論、天皇の政治的権威の利用という一般的理由が上回るであろう）。

## ・マッカーサー回想記「天皇との会見」

裕仁天皇は御用車のダ임ラーに宮内大臣と向い合せに乗って、大使館に到着した。（中略）天皇の通訳官以外は、全部退席させたあと、私たちは長い迎賓室の端にある暖炉の前にすわった。

私が米国製のタバコを差出すと、天早は礼をいって受取られた。そのタバコに火をつけてさしあげた時、私は天皇の手がふるえているのに気がついた。私はできるだけ天皇のご気分を楽にすることにつとめたが、天皇の感じている屈辱の苦しみが、いかに深いものであるかが、私にはよくわかっていた。

私は天皇が、戦争犯罪者として起訴されないよう、自分の立場を訴えはじめるのではないかと、という不安を感じた。連合国の一都、ことにソ連と英国からは、天皇を戦争犯罪者に含めろという声がかかなり強くあがっていた。現に、これらの国が提出した最初の戦犯リストには、天皇が筆頭に記されていたのだ。私は、そのような不公正な行動が、いかに悲劇的な結果を招くことになるかが、よくわかっていたので、そういった動きには強力に抵抗した。

ワシントンが英国の見解に傾きそうになった時には、私は、もしそんなことをすれば、少なくとも百万の将兵が必要になると警告した。天皇が戦争犯罪者として起訴され、おそらく絞首刑に処せられることにでもなれば、日本中に軍政をしかなければなくなり、ゲリラ戦がはじまることは、まず間違いないと私はみていた。けっきょく天皇の名は、リストからはずされたのだが、こういったいきさつを、天皇は少しも知っていなかったのである。

しかし、この私の不安は根拠のないものだった。天皇の口から出たのは、次のような言葉だった。「私は、国民が戦争遂行にあたって政治、軍事両面で行なったすべての決定と行動に対する全責任を負う者として、私自身をあなたの代表する諸国の裁決にゆだねるためおたずねした」

私は大きい感動にゆずぶられた。死をともしうほどの責任、それも私の知り尽している諸事実に照らして、明らかに天皇に帰すべきではない責任を引受けようとする、この勇氣に満ちた態度は、私の骨のズイまでもゆり動かした。私はその瞬間、私の前にいる天皇が、個人の資格においても日本の最上の紳士であることを感じとったのである。（中略）

天皇との初対面以後、私はしばしば天皇の訪問を受け、世界のほとんどの問題について話合った。私はいつも・占領政策の背後にあるいろいろな理由を注意深く説明したが、天皇は私が話合ったほとんど、どの日本人よりも民主的な考え方をしっかり身につけていた。天皇は日本の精神的復活に大きい役割を演じ、占領の成功は天皇の誠実な協力と影響力に負うところがきわめて大きかった。

## ・政府の発禁処分とGHQの取り消し

本頁下にあるように、9月27日の会見時に撮影された天皇とマッカーサーの写真は、9月29日の朝刊にいっせいに掲載された。ところが、東久邇宮内閣は、天皇の写真の掲載は不敬にあたるとして、同日の新聞を発禁（発行禁止）処分とした。（単に天皇の写真掲載が不敬というだけでなく、天皇とマッカーサーの身長差、さらにラフな格好のマッカーサーと正装で直立不動の天皇という構図が、天皇の権威を失わせ、日本の敗戦を象徴づける内容となっていたことが発禁の直接原因と考えられる。）

戦後であっても発禁処分が行えた理由は、戦前に制定された新聞紙等掲載制限令がまだ効力を有していたからである（治安維持法など、戦前の法律は戦後暫くの間形式上有効であった）。

しかし、このような言論の統制をGHQが許すはずもなく、同日午後には、GHQにより30日朝刊の発禁処分取り消しが指示された（言うまでもなく、新聞掲載によりマッカーサーの権威を見せつけようとしたGHQの意図に反していたからである）。この事件を受け、同日GHQは戦時諸法令廃止指令を出し、言論統制などを目的とした戦時中の法律を廃止するよう指示した。これにより、新聞紙等掲載制限令は10月6日に、治安維持法は10月15日に廃止が公布された。

天皇とマッカーサーの会見は、その写真が日本の敗戦と占領政策の現状を痛感させる象徴的なものとなっただけでなく、この会見に付随した発禁事件により、戦後も継続されていた言論統制を廃止させ、自由な言論を許可する契機となったのである。